

歯科医療は大きく分けると、歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士という3種類の職種の分業によって成り立っています。その中で、現在、歯科衛生士不足が表面化してきていますが、今後の問題として、歯科技工士もいなくなってしまうという懸念が出てきました。

歯科技工士学校の入学者は極端に少なくなり、現在就業中の歯科技工士も次々に離職していく傾向にあります。その原因は、歯科疾患の中でう蝕の発生率が低下し、補綴の必要性が少なくなったということです。単独の充填物程度のものを除けば、補綴関係の技工物というのは歯科医師が抜歯をしない限り発生しません。

私が歯科医師として仕事を始めたころは、来る患者、来る患者、口を開ければ虫歯だらけという状況でしたから、1日診療すると、いったい何本のう蝕歯を抜歯していたことか。当然、その数だけ技工物が発生していたので、歯科技工士も目が回るほど忙しかったことでしょう。それが今ではう蝕の減少により、ほとんど抜歯という選択はなく、歯科治療そのものが検査と予防という分野に大きく方向転換しようとしています。したがって歯科技工物はめったに出ない、それに対して歯科技工士数は従来の数と変わらない、この需要と供給のアンバランスこそ歯科技工士問題の根源です。

よく考えてみれば、この問題は歯科技工士だけの問題ではなく、歯科の二大疾患の一つであるう蝕が極端に減少したわけですから、それを治

療する歯科医師も必要なくなったわけです。したがって歯科医院は深刻な患者不足に悩まされ、その対策として歯科大学の入学者数を減らし、歯科医師国家試験の合格者数も年間2,000名程度に絞り、国策として歯科医師全体の数を削減しようとしています。歯科技工士も同様に、全体の数を需要に合った状況まで減らせれば、一気に歯科技工士問題は解決することができるのですが、ここで問題になるのは、歯科医師はう蝕の治療以外でも、歯周病や歯科疾患の検査、予防の分野など、他に行き場所

があるのに対して、歯科技工士は技工以外のことはできないので、他に受け皿が見当たらず、このまま歯科技工士の自然減少を放置しておくと、絶滅危惧種のごとく、あまりにも急激に数が減ってしまい、最後は本当に必要な歯科技工士まで確保できなくなり、歯科衛生士と同じように、近い将来深刻な歯科技工士不足がやってくる可能性があるということ

です。

我々は、すでに、歯科衛生士の育成と確保において、必要な対策が取れなかったために、現在、深刻な歯科衛生士不足に悩まされているわけで、更に歯科技工士でも同じ失敗を繰り返すことだけは何としても避けたいものです。そのためには、思い切った構造改革が必要になると思われます。具体策に関しては紙面の都合上、次回の執筆機会に紹介することにしましょう。

論壇

歯科技工士問題について

茨城県保険医協会理事 久松 雅彦